



地域の救急医療を支える



救急科 部長

市川 元啓

▶ 軽症や中等症の中に潜む重症

当院救命救急センターの年間患者数は、2021年度で約4万人。夜間の急な腹痛や頭痛、転倒による外傷など、さまざまな訴えを抱える患者さんの「万が一」を見逃さないよう、当院救急科医は日夜診療に当たっている。

2021年の秋、70代女性が屋外で気を失い当院へ救急搬送された。市川元啓医師が問診を始めるが、身体に痛みはなし。不整脈や肺塞栓、急性心筋梗塞なども疑うが、検査をしても異常がない。それでも失神したのはなぜか。隠れた原因を見つけるため、超音波検査を実施。「これだ」。異常を見つけ、すぐ造影CT検査を行った。診断は大動脈解離。すぐさま心臓血管外科につないで緊急手術が間に合った。

「軽症や中等症の中に潜む重症を探し出す。救急医は隠れた重症を見つける専門家だと思っています」と市川医師。当院救急科は28人の医師が所属し、若手への指導も多い。自身の経験も伝えながら、センター全体で隠れた疾患を見逃さないよう、尽力している。

disease

取り扱う主な疾患

失神【しっしん】

急激に脳の血流が失われて意識を失うことと定義されています。当院救命救急センターに失神で搬送される年間患者数は、2021年度で78人。多くは一時的に脳血流が減少して起こる良性失神ですが、不整脈や肺塞栓、急性心筋梗塞などの循環器疾患のほか、無痛性

大動脈解離のような重大な疾患が隠れていることもあります。

失神はしばらくすると意識を回復しますが、その裏に潜む疾患もあります。自己判断ではなく、受診されることをお勧めします。

personality

私の信条

「ERの医者は指揮者（コンダクター）のような存在であることが望ましい」。名古屋の病院に勤務していた際に上司からいただいた言葉です。患者さんの担当医を決めるだけでなく、重症度や診療する医師のスキルや経

験値、患者さんとの相性など、多面的に指揮をとることが求められます。患者さんの転帰がより良いものとなるための指揮です。

災害診療でも、重症患者さんでも、救急外来の患者さんでも、コンダクターとしての役割が求められるし、果たしていきたい信条です。

救急外来で行っていること

今は不応需件数の減少です。「救急搬送を絶対に断らない」病院はありますが、当院ではまだ至っていません。近くの医療機関に何件も断られ遠方の病院へ搬送される、30分、1時間後に搬送先が決まる事例もあります。当院だけの取り組みでは難しいため、地域の医療機関や救急隊、保健行政などと協働して解消し、患者さんが安心して救急医療にかかれる、その仕組みを確かなものにしてほしいです。

私の健康法

不規則な業務なので、健康的な毎日とは言い難いですが、心の健康を保つために子どもとよく遊んでいます。私は子どもたちのために仕事をしています。彼らが幸せな人生を過ごしてほしいと思うし、今はわからなくても将来、彼らが大人になって父親になった時、「この父親の息子でよかった」と思っほしいし、後世に残せるような仕事をしているつもりです。

いちかわ もとひろ

愛知県豊橋市出身。三重大学医学部卒。茅ヶ崎徳洲会総合病院、名古屋掖済会病院を経て2014年に倉敷中央病院に着任。日本救急医学会救急科専門医、JATEC インストラクター。倉敷へ引っ越して以来、用水路の危険性に着目、用水路等転落事故防止対策検討会議に参加するなど、行政への働きかけを行いながら用水路転落症例の防止に取り組んでいる。





たむら のぶいちろう

京都市出身。鹿児島大学医学部卒。川崎医科大学附属病院、倉敷中央病院で臨床研修。川崎医大附属病院救命救急センターを経て2013年に倉敷中央病院に着任。日本外科学会専門医、日本救急医学会救急科専門医、日本集中治療医学会専門医。大学では馬術部に所属、最近再開。「同じ指示でも馬によって反応はさまざま、それが面白い」

Introducing a doctor

vol.4

救急科 部長

田村 暢一郎

▶ 重症外傷を負われた患者さんの救命

2022年の春、救急受入要請が救急隊から入った。歩行中の男性に軽乗用車が衝突したという内容で、救急車の到着予定は20分後。救急チーフの田村暢一郎医師は看護師や診療放射線技師、臨床検査技師らと協力し、緊急輸血や気管挿管などの準備に素早くとりかかる。到着5分前、救急隊から連絡があった。「心停止しています」。

到着後すぐに開胸し、心臓マッサージを行い、緊急輸血を行った。腹部からの出血の可能性が高く、心臓マッサージを行いながら開腹。開腹中に心拍が再開した。脾臓などから大量出血があり、脾臓摘出術、腓体尾部切除術で止血した。

当院救命救急センターには2021年度で約220人の重症外傷が救急搬送されており、田村医師も加わる外傷・急性期外科チームが対応に当たる。救急科医だけでなく整形外科医や脳外科医、放射線科医、手術室、集中治療室、一般病棟、リハビリスタッフによるチームが存在することで、共通認識を持って質を保ちながら診療できる体制を整えている。

disease

取り扱う主な疾患

外傷【がいしょう】

2021年度に重症のケガで当院の集中治療室に入室された患者さんは120人。交通事故、ご自宅での転倒、高所からの転落や農作業中の事故などで重度のケガを負って搬送されました。頭、頸椎（首の骨）、四肢、骨盤などに重度の損傷を負ったり、脊髄損傷で手足の

動きに大きな障害を残す方もおられます。農機具の歯による傷は土などの汚染もあり、傷から細菌（ばい菌）が入り治療に難渋することもあります。「事故無く、今の生きがいや楽しみが続くようにお過ごしいただきたい」。それが私たちの願いです。

personality

私の信条

私は外傷をメインに診ていますが、重症外傷の発生はそこまで多くない。日本は外国に比べればはるかに安全。しかし日本は海外と比較して高齢者外傷の割合が多い。高齢者は長期間のリハビリや社会調整が必要となる

ケースが多く、治療後にいかに元の生活に戻るかが大切。社会が求める医療・役割にフィットできるようにしていきたい。

世間話で、「非日常」を「日常」に

海外で外傷の経験を積んだのち、帰国後に「世間話プロジェクト」を始めました。救命救急センターへ搬送され入院した患者さんは、生活の場から一転、非日常を強要されるわけです。朝7時に起き、夜9時に寝る。それがもう、環境変化そのもの。病院は医療者にとっては「治療の場」、患者さんにとっては「生活の場」。入院生活のサイクルは変えられないけれど、会話ならできると考えました。

患者さんに一番近い看護師がキーパーソン。「今日の天気はなんですか?」「明日は雨が降りそうですね。それが患者さんにとって貴重な時間だと病棟看護師にレクチャーし、医療の会話ではない「世間話」をしてもらう取り組みを始めました。救急科が介入する病棟では共感してくれた看護師を中心に、少しずつ広がっています。

病院が社会に貢献できること

健康に関心がない方とどうやって向き合うかが、問題解決のアプローチとして必要です。病院が社会に貢献できることはたくさんあります。残りの医者人生で、実現に向かっていきたいなと思っています。





地域の救急医療の 砦として

救急外来受診者数 (2021 年度)

30,971 人

うち入院された方 4,744 人 (15.3%)

救急搬送受入れ件数 (2021 年度)

9,408 件

うち救急搬送後入院数 4,983 人



救命救急センターには
医師、看護師のほか
薬剤師、救急救命士、
診療放射線技師、
臨床工学技士、
MSW、事務など
多職種が集い、365日
患者さんの命に向き合う



救急専用のCTや処置室があり、直上の2階に手術室、4階には救急ICUを設備。24時間365日いつでも専門科に相談できる体制を構築しています。脳神経外科・脳卒中科、整形外科、形成外科、循環器内科、腎臓内科、小児科、感染症科とは定期的にカンファレンスを実施し、救急外来での診断や処置に対するフィードバックを得ています。

「軽症から最重症まで診る」

遡ること1975年。第1棟1階への救急診察室設置から当院の救急の歴史が始まりました。

2006年に初めて救急専従医が着任。2012年に3棟1階へ移転し、2013年に岡山県5番目の救命救急センターとして認可されました。その後「地域の救急の砦」という自負、患者さんを救命したいと意欲をもった医師が集い、2022年7月現在、救急専従医は28名（救急科専門医9名）。救急外来、救急ICU、急性期外科、総合診療の4チームがあり、医師はそれぞれの専門性に軸足を置きながら診療にあたっています。

当院は災害拠点病院（地域災害医療センター）の指定を受けており、地震・豪雨災害発生時には要請に応じてDMATや医療救護班を派遣しています。2018年の西日本豪雨災害では倉敷市真備町で大規模水害が発生。当院は災害対策本部を立ち上げ、浸水した医療機関の入院患者さん受け入れなどにあたりました。

救命救急センターへ搬送される経験は、多くの方は一生に一度、二度。医療従事者が考える救急、緊急度とは違うかもしれない。しかしその背景には、もしかしたら重大な症状が潜んでいる可能性がある。

私たちは軽症から最重症まで診る。

この想いのもと、各チームが日々、患者さんと向き合います。





倉敷中央病院からのお知らせ



救急医療を必要とされる方に応えたい。 34万 km のその先へ、 想いを乗せて走るためのご寄付を。

今回引退するのは、心臓専門のドクターカーとして長く活躍した車両です。1代目の車両は23年走り続け、2005年に2代目へ、その使命を引き継ぎました。年間最多で600回を超える出動要請に応え、患者さんのもとへ走り続けました。

そして、2022年。17年間で走行距離は34万キロを超えました。使用頻度の高い救急車両として、既に耐用年数を超えています。患者さんの安全を考え、廃車が決まりました。患者さんの危機に一刻も早く駆けつけるため、新規購入が必要です。



ご寄付いただく皆さまの想いも一緒に乗せて、これから先も走り続けたい。

クラウドファンディング挑戦中！

All-in 形式のため、目標金額の達成の有無に関わらず、集まったご寄付を購入費に充てさせていただきます。

プロジェクトの目標額



購入費の約 60%

10,000,000円

本プロジェクトへのご寄付は**税制優遇の対象**となります。
詳細は下のQRコードまたはURLから特設サイトをご覧ください。

<https://readyfor.jp/projects/kch>

倉敷中央病院 レディーフォー

検索



ご寄付の募集期間

2022年7月27日-9月30日

ご寄付に関するお問い合わせ先

担当：倉敷中央病院クラウドファンディング事務局
E-Mail：koho-cf@kchnet.or.jp
TEL：086-422-0210
所在地：岡山県倉敷市美和 1-1-1



公益財団法人 大原記念倉敷中央医療機構

倉敷中央病院

公式SNSで情報発信中

市民公開講座の開催状況や疾患の解説記事、
当院で勤務する職員の紹介など、さまざまな
情報を公開していますので、ぜひご覧ください！

